



京都フィロムジカ管弦楽団 第34回定期演奏会



写真上：交響曲『佛陀の生涯』初演の演奏会でベルリン・フィルを指揮する貴志康一(1934年11月18日)

写真下：貴志康一の指揮姿(1936年) いずれも学校法人甲南学園 貴志康一記念室 所蔵資料

京都芸術センター制作支援事業

学校法人甲南学園 貴志康一記念室後援

ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、メンバー諸君が仲間と貴重な楽しい音楽経験を積み重ねて、はや第34回目となりました。今回の演奏会は、脇坂英夫氏をお迎えし先生のご指導のもと、ますます努力と研鑽を積み重ね、魅力あふれる交響曲を披露してくれるものと期待致しております。

本日の演奏曲はショスタコーヴィチから貴志康一まで多彩ですが、私の好きな曲にリスト作曲交響詩「レ・プレリュード (Les Préludes)」があります。この曲は1848年に作られた曲で、この題名はフランスの詩人でグノー、ドビュッシー、ビゼー、サティ、ミヨー、ラロ等当時の作曲家達がオペラや歌曲、合唱曲の題材に取り上げられた事で有名なラマルティエヌ (Alphonse Marie Louis de Prat de Lamartine) による“詩的冥想録 (Meditations Poétiques)”の中から「人生は死に対する一連の前奏曲である」と云う思想で書かれた部分を題材とした作品です。これを聴くと、若い自分が世間と云う大海にそろりと船を漕ぎ出して人生の荒波にもまれながら成熟して行く過程を思い起こさせる様な気持ちになります。何度聴いても胸の高鳴りを覚える曲の一つだと思います。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました会員の皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問 和田之宏

作曲家の作品は、本人が生きぬいた時代背景に強く影響されます。どのような家庭に生まれ、どの国で音楽を学び、そしてその曲を作ったとき自国の状態がどうであったかは作品に大きく現われるでしょう。本意ではなくとも政治に影響された芸術家も数多くいます。作品を見るときその作曲家がどのような思いで曲を描いたのか、私たちは十分理解しています。言いつくせなかった言葉を音にして聴衆に伝えることができれば良いと思います。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

京都フィロムジカ管弦楽団団長 長岡武志

京都フィロムジカ管弦楽団 第34回定期演奏会

2013年12月22日(日) 午後2時開演 八幡市文化センター・大ホール

1:15～ ロビーコンサート

♪ Programm ♪

ショスタコーヴィチ (1906-1975) / ロシアとキルギスの民謡による序曲
Дмитрий Шостакович : УВЕРТЮРА НА РУССКИЕ И КИРГИЗСКИЕ НАРОДНЫЕ ТЕМЫ, соч.115

リスト (1811-1886) / 交響詩『前奏曲』
Franz Liszt : Les Préludes , Symphonische Dichtung Nr. 3

— 休憩 —

貴志 康一 (1909-1937) / 交響曲『佛陀の生涯』
Kishi, Koichi : Symphonie "Das Leben Buddhas" es-moll
I. Molto sostenuto-Allegro
II. Andante
III. Vivace
IV. Adagio

指揮 脇坂 英夫

京都芸術センター制作支援事業

後援：学校法人甲南学園 貴志康一記念室

お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- 携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。
- 演奏中の私語は固くお断りいたします。
- 客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- 演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- 「咳エチケット」にご協力ください。咳、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のど飴」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- 演奏者が音を出してなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

指揮者



脇坂 英夫 (わきさか ひでお)

京都市立芸術大学音楽学部卒業。トロンボーンを大和久俊寿氏に師事。卒業に際して「田中賞」を受賞し同年の卒業演奏会および関西新人演奏会に出演する。1982年宇治シティフィルハーモニーを結成し、以来60余回の定期演奏会を指揮。また、これまでに京都グリーン・ユース・オーケストラ、京都三大学合同交響楽団、京都ディレクターズバンド、関西フルート・オーケストラなどでの客演のほか、滋賀県立大学オーケストラでは毎年客演指揮を行っている。現在、府立高等学校において教鞭をとるかたわら、宇治シティフィルハーモニー代表としてアマチュア音楽活動の発展に力を注いでいる。

∞ロビーコンサート∞

13:15より

クック/序奏とロンディーノ

Pos.: 宮下、中村、藤井、 Tub.: 中塚

…世界でもほとんど知られていないイギリスのクック (K.Cook) が1951年に作曲した、世界で最も古いチューバ4重奏曲と言われている作品を4本の金管楽器に編曲した作品です。スライド楽器であるトロンボーンにとっては難度が高い曲ですが、前半はコラール風の旋律、そして後半は快活な Rondó と変化に富み非常に聴きやすい曲です。

ホルスト/『セントポール組曲』より 第1曲「ジーク」

Vn.: 小幡、新庄、森、中居、八木、高谷 Va.: 渡邊(泰)、高原 Vc.: 多田、秦野 Kb.: 田中(郁)

…作曲者のホルストはイギリス出身、セントポール女学校にて教職を務めていました。その弦楽合奏団のために作曲されたのがこのセントポール組曲です。第4曲ではグリーン・スリーヴスのテーマが使われることでも有名なこの曲、今回は第1曲を演奏します。イギリス民謡を主体とした親しみやすいメロディと、弦楽の音色をお楽しみください。

ヒンデミット/管楽7重奏曲より 第1・5楽章

Fl.: 間嶋 Ob.: 丸井 Kl.: 関 Bkl.: 黒田(菜)
Fg.: 石塚 Hr.黒田(直) Tp. 北山(武)

…貴志康一がベルリン時代に交流のあったヒンデミット (P.Hindemith) の作品を演奏します。この曲は、通常の本管5重奏にバスクラリネットとトランペットが加わる珍しい編成の作品です。特に、今回演奏する貴志康一の交響曲『佛陀』と同じくバスクラリネットが活躍する事から、共通点を感じられると思いきり取り上げる事にしました。

印刷のことなら

大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町荒神口上ル二筋目東入ル

TEL (075) 231-1727 (代)

FAX (075) 256-4604

曲目解説

Tp.: 遠藤 啓輔

本日は、「序曲」「交響詩」「交響曲」と種類は異なるが、いずれも表題を持った作品が並んでいる。こうした作品の種類について、音楽史的正確さは度外視して、一音楽愛好者としての立場から概説しておきたい。

「序曲」というとオペラなど劇作品の冒頭を飾る作品というイメージが強いと思うが、独立した管弦楽作品が「序曲」と題されていることも多い。むしろ、交響曲でも組曲でもない管弦楽作品を（ほかに呼び方が見当たらないから）「序曲」と呼ばざるを得ないのでは、という印象を受ける。本日演奏するショスタコーヴィチ作曲『ロシアとキルギスの民謡による序曲』も、“ロシアとキルギス”なるオペラがあるわけではなく、独立した短い管弦楽作品である。表題は、民謡を用いた、という説明の意味しかなく、音楽を聴くうえで不可欠な情報ではない。一方、シューマンの序曲『マンフレッド』のように、表題に示された文学作品のストーリーと音楽とが不可分に結びついた「序曲」もある。このような作品は、のちにリストによって開発される「交響詩」という音楽ジャンルに類するものと言えよう。

リストは詩的内容と音楽の内容が結びついた音楽作品を作り「交響詩」と名付けた（なお、「音詩」というよく似た用語がリスト以前からあった。シベリウスや R.シュトラウスは交響詩ではなく音詩の語を使っている。もっとも、音詩と交響詩に厳密な違いはなさそうだ）。そのリストが書いた交響詩の代表作が本日演奏する『前奏曲』だが、まるでオペラのオープニングであるかのような表題がつけられているので紛らわしい。「前奏曲なのになぜオープニングに演奏しないのか？」と困惑する向きもあるかもしれないが、この『前奏曲』は詩の内容に即して付けられた題名なのであって、何かの前に演奏すべき曲という意味ではない。

さて、貴志康一作曲の交響曲『佛陀の生涯』は、標題と音楽内容が不可分に結びついている点で交響詩と呼んでも良い作品だ。にもかかわらず敢えて「交響曲」とされているのは、やはり楽聖ベートーベンに対する強い憧憬の念の現れなのだろう。ベートーベンの交響曲は後続の作曲家にとって越えがたい壁であり続けた。ベートーベンに追いつきそれを越えようという必死の思いで書いた作品には、それが古典交響曲と似つかぬ形式をとっていても「交響曲」と題されることが多い。貴志のこの交響曲も、楽聖を生んだドイツの地に単身乗り込んだ青年が、自身の誇り（あるいは東洋の誇り）を賭けて書き上げた稀代の作品で、「交響曲」の名を冠するにふさわしい。初演直後の批評には標題音楽を交響曲と名付けることに対する批判があったようだが、音楽愛好者としての立場からすれば、そんなことはどうでもいい。芸術は、それに触れた人が幸せな気持ちになることができたなら、その存在価値を堂々と誇って良いと思う。貴志の『佛陀の生涯』はまさにそのような誇るべき作品だ。

ショスタコーヴィチ／ロシアとキルギスの民謡による序曲

1963年、作曲者57歳の作品。19歳で交響曲を作曲し、69歳で死去したショスタコーヴィチとしては晩年の作品と言えよう。トランペットが2本しか使われていないほか、イングリッシュホルンやバスクラリネットのようなショスタコーヴィチが好んで使った特殊管楽器も使われていないなど、楽器編成の簡潔さが注目される。この年は大曲・交響曲第13番『バビ・ヤール』を作曲した翌年にあたり、その後は室内楽曲を中心に作曲。1969年の交響曲第14番も簡潔な編成だ。かつて巨大オーケストラを操ったショスタコーヴィチは、晩年になって簡潔な編成で最大限の音楽効果を引き出す面白さに目覚めたのかもしれない。この曲は、5拍子をはじめとする様々な拍子が目まぐるしく入れ替わり、その変拍子が得も言われぬ興奮を惹き起こす。特殊楽器が無くても存分に楽しめる音楽になっている。

この年の6月ショスタコーヴィチは、当時ソヴィエト連邦の一部であったキルギスタンを旅行した。キルギス（クルグス）は中国と国境を接する中央アジアの国で、領土の9割が1500mを超える高原地帯である。

イスラム教徒が多く、古くは遊牧を生業としてきた。ショスタコーヴィチは「自然の美しさ」や「行く先々で新しく色彩豊かで美しい何かに遭遇」したことや、「誰もが歌っているかに見える客好きのキルギスの人々の可憐な歌を楽しんだ、と書き記している。この作品は、いわば、作曲者が旅行で触発を受けた民謡を用いて、感興の赴くままに書いたオーケストラによる壮大な遊び、と言えよう。

序奏は、木管楽器を多用したショスタコーヴィチらしい癖のある響きで雄大に重々しく始まる。アレグロに入ってから高原の遊牧民が騎馬で疾駆するような快活な楽想となり、なるほど、キルギスでの感興が音楽になったのだらうと思わせる。絢爛たる打楽器の音も、馬具がぶつかり合う音にさえ聞こえてくる。ただし、民謡を使用しているのではあろうが、これは紛れもなくショスタコーヴィチの音楽だ。時折顔をのぞかせる前衛的な響きが官能を惹き起こす旋律線と、機械的に連続する伴奏音型がやがて陶酔へとつながっていく離れ業はショスタコーヴィチの醍醐味だ。冒頭の雄大な旋律が金管楽器によって再現されて音楽はいったんクライマックスを迎えるが、実はここは曲の終結ではない。先ほどの盛り上がりが嘘のように、静かにゆっくりと舞踏の音楽が再始動する。やがてそれは際限なく加速し盛り上がり、真の大団円を迎える。

リスト／交響詩『前奏曲』

ドイツ系ハンガリー人としてエステルハージ家の領内に生まれたリストは、幼くしてピアニストとしての才覚を発揮し、ヴィーンやパリへ修行と演奏の旅に出る。長じても演奏家、作曲家、教育者としてヨーロッパ中を旅から旅へと移動する生涯を送った。また、音楽の英才教育を受けるあまり一般教養の学習が不足していたため、膨大な読書によってそれを補償した。このような独特な人生を送ったリストは、恐らく因襲にとらわれない斬新な発想のできる教養人だったのだらう。文学と結びついた管弦楽作品を「交響詩」という新たなジャンルとして位置付けたのはそうしたリストならではの偉業と言えよう。

本日演奏する交響詩『前奏曲 (レ・プレリュード)』は、「交響詩」の命名者リストが書いた3曲目の交響詩である。『前奏曲』という題名は、19世紀フランスの詩人ラルティエヌが書いた「生とは死の前奏曲である」という内容の詩に依っている。ただし、リストがこの詩を読んでインスピレーションを受けて作曲した、というものではないらしい。平たく言ってしまえば、詩と音楽をともに味わえば楽しさ2倍、ということだろう。楽譜の冒頭に詩の一節が載せられているが、二重否定や疑問形を多用した文章は日本語訳でも詩的センスのない僕にはさっぱり意味が分からない。そこで、意味をとりやすくなるよう大胆に約してみた。

「生とは、死によって荘厳に始まる未知の賛歌への、ひと続きの前奏曲である。確かに愛はすべての存在の夜明けといえよう、しかしながら、幸福は最初から嵐によって邪魔され、美しい幻影は祭壇を打ち壊す落雷の如き苛烈な突風で吹き飛ばされる、運命とはそうしたものだ。そのような嵐によってひどく傷つけられた魂は、慈悲深い自然のふところとも言うべき田園の中で、穏やかで静かな生活を送って慰められたいと願う。それにもかかわらず人は、ようやく享受し得た平穩の楽しみの中に長く安住することを良しとしない。“警告のラッパが鳴り響く”や否や、人は戦場に戻り、その戦いの危険を気にすることもなく、戦いながら自覚を取り戻し、自らの持てる力を取り戻していくことだろう。」

交響詩『前奏曲』は、運命の過酷さを暗示するように沈痛に始まり、田園を夢見るような穏やかな楽想と闘争的で苛烈な楽節が鮮明に対比されたのち、誇り高い決意に満ちた行進曲によって閉じられる。なるほど、この詩のイメージとよく合っている。しかしながら、やはり音楽作品である以上、個々人が自由に発想の翼を広げて聴けば良いと思う。実際僕は、終盤の軍楽風の行進曲が出てくる場面では詩の内容とかなり違うイメージが浮かんでくる。この軍楽隊は文字通りの軍隊ではなく、「万軍の主」としての神の姿ではないのか。全曲の最後が、宗教音楽でよく使われる「アーメン終止」という和声進行で終わることも手伝って、信仰告白的に感じられるのだ。敬虔なカトリック教徒だったリストは、生という前奏曲を終えるとき神が救済のために降りてきてくれる、という確信を持っていたのかもしれない。

貴志 康一／交響曲『佛陀の生涯』

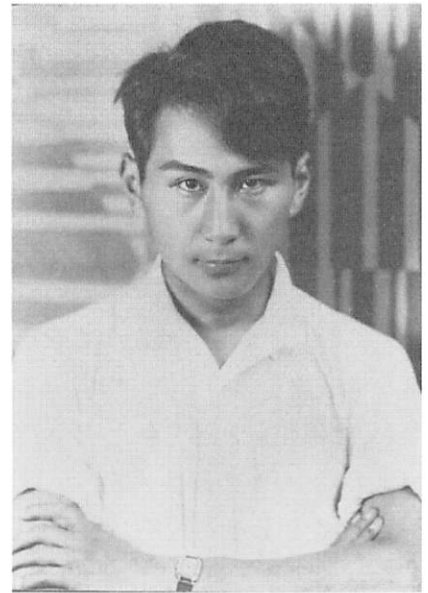
貴志康一について

関西で音楽愛好者をやっていると「その昔、20代の若さでベルリン・フィルを指揮して自作の交響曲を演奏した大阪人がいたらしい」という伝説に否が応でも触れることになるが、「ほんまかいな？」というのが正直な印象だった。この神話的な「貴志康一」なる人物の生涯を、毛利眞人氏が驚嘆すべき調査を以て、名著『貴志康一 永遠の青年作曲家』（国書刊行会）に生き生きと描き出した。貴志について知るには同書を読むのが一番なのだが、これから聴いていただく交響曲のイメージが豊かになるよう、毛利氏の著書を頼りに、僕の感想も交えながら貴志の略歴をたどってみたい。

貴志康一は1909年、大阪の資産家の家に生まれた（吹田市にある生家「旧西尾家住宅」は現在、重要文化財になっており、貴志のメモリアルコンサートの会場としても市民に親しまれている）。まだ都市化が進んでいなかった淀川のゆったりとした川べりで生活し、天神祭を楽しんだ。大阪が工業都市化して住環境が悪化すると、当時まだ自然豊かな漁村だった芦屋に家族で引っ越す。貴志は甲南学園に通い、個性重視の校風の中で伸び伸びと育った（現在、甲南学園には貴志康一記念室がある）。貴志は音楽のみならず、絵画や映画などにも没頭したが、やがてヴァイオリンに傾倒し、外国人教師から専門的な指導を受ける。また、宝塚で指揮者をしていたヨーゼフ・ラスカ（第1・第4交響曲、テ・デウムの日本初演者としてブルックナー愛好者の間で有名な人物。『ブルックナー／マーラー事典』東京書籍より）に音楽理論を師事するなど、後に作曲家となる素地が作られていった。

貴志は17歳の時に単身ヨーロッパに留学。船でインドなどを経由しながらジュネーヴに行き、次いでベルリンに移る。そののち貴志は、2度の帰国を挟みながらも1935年までベルリンで活動する。ベルリンで貴志は頻りに引越しをしたが、どの家も中心街に近い瀟洒な建物だ。そして、一流ホテルで開催されるダンス・パーティーに頻りに出席するなど、一流の文化人としてふるまった。貴志の足跡をたどってみると、とにかく一流であろうとした人であろうことがうかがえ、その努力は並大抵のものではなかったろうと想像される。少年時代から多才な趣味人であった貴志は、ベルリンにおいてもヴァイオリン修行のみならず、音楽という枠すらはみ出して活動した。特に映画にのめり込み、大作曲家ヒンデミットによる映画音楽の授業だけでは飽き足らず、ついには演技の勉強にまで手を出した。こうした貪欲な探究心は、のちの成功につながっていく。帰国中に撮影した、日本をテーマにした映画がベルリンで注目され、映画の劇伴音楽も作曲・指揮することになった。映画での成功が、作曲家・指揮者としての成功に結び付いたのだ。これがついには、ベルリン・フィルを自ら指揮して自作の交響曲『佛陀の生涯』を初演する、という伝説的な成功につながっていくのである。また、ヴァイオリン学生だった貴志が堂々たる指揮ができた背景には、演技を勉強したことが役立っていたという。貴志の貪欲な探究心はどれも無駄ではなかったのだ。もっとも、こうしたベルリンでの成功の背景には、日本が満州事変や国際連盟脱退などで国際的に孤立していく中で、文化によって日本を紹介しようと在独日本人が熱心に動いたという歴史的事情があったようだ（『貴志康一と音楽の近代ベルリン・フィルを指揮した日本人』青弓社）。モーツァルトのレクイエムの例を出すまでもなく、歴史的傑作はしばしば、神の絶妙の匙加減ともいべき偶然から生まれる。貴志も、そうした歴史によって選ばれた稀代の才能であり、交響曲『佛陀の生涯』は歴史のうねりが産み落とした奇跡的な傑作と言えるだろう。

貴志はベルリン・フィルを指揮して自作の小品集を録音し、日本に帰国。帰国後は主に指揮者として活躍し、多忙を極めた。1936年、内臓を患い、闘病生活ののち翌年死去。享年28歳。



貴志 康一

学校法人甲南学園貴志康一記念室所蔵資料

交響曲『佛陀の生涯』について

この作品はベルリン・フィルを指揮するコンサートに合わせて書かれたものである。1934年11月18日に初演されたのち、翌1935年の1月25日にはラジオ放送用に再演された。

貴志の家族は佛教に深く帰依していたことから、「佛陀」は身近なテーマだったのだろう。加えて東洋人にとっては身近な佛教を、佛教とは縁遠い西洋音楽のテーマに選んだことは、「東洋人である自分が西洋音楽をする理由」について煩悶する青年らしい問題意識の、ひとつの回答ともいえるだろう。釈迦の生涯に沿ったストーリーが、4楽章構成の古典的な交響曲形式と見事に融合している。また、テーマのみならず、旋律もどこか日本風で、懐かしさを感じさせる。日本人の琴線に響く歌が、西洋の古典交響曲の形式によって見事な構成美を獲得したと言える。

なお、『佛陀』と題された7楽章構成の作品の構想メモが残されている（貴志康一記念室蔵）ことから、「後半の3つの楽章はメモしか記されないまま死亡したいわば未完成交響曲」などといった、まるでマーラー10番を思わせる説明がなされることがあるが、少なくとも現行の4楽章形式で完璧な完成作品の体裁がとられており、未完成作品とは到底考えられない。件の構想メモは五線紙に日本語で書かれたもので、丁寧な筆致は貴志の『佛陀』なる作品にかける意気込みの深さを思わせる（「釈尊」「壯麗」「獨創的」の文字は特にしっかりとした書きぶりだ）。しかし、この構想メモはペンではなく鉛筆で書かれており、やはり飽くまでもメモにすぎないと思われる。当初の壮大な構想が徐々に洗練され4楽章の交響曲へと結晶化したと考えるのが妥当だろう。マーラーでたとえるなら、未完成の10番ではなく、6楽章形式の当初構想から最終的に4楽章形式に落ち着いた4番の成立過程に近いと言える（『ブルックナー／マーラー事典』東京書籍）。

また貴志記念室には、ラジオ放送のためになされた1935年1月25日の再演における解説文（ドイツ語）も残されている。執筆者は明記されていないが、貴志以外に作品について解説できた人物はいないだろう。

「貴志康一の交響曲『佛陀の生涯』は、独特で精神的なアジアの雰囲気を描き出します。インドの照り輝く太陽、ヒマラヤの巨峰にかかる月、夜の無限の静けさ、黄海に立つ荒々しい波、見渡すことのできないほどの中国の平野、広大な長江。この地に佛教は数千年の昔から根づいていました。」と書き出される、なかなか詩的な文章だ。放送用の解説と想定されるので、多くのリスナーに理解してもらうために過剰な説明がなされている可能性もあるが、作品のイメージを膨らませるのに有用なので、以下で随時紹介したい（日本語訳は、毛利『貴志康一』p.234、青弓社『貴志康一と音楽の近代』p.182を参照しつつ、一部改変した）。

「第1楽章はアジアの無限の広さを描写します。そこで、ゴータマ・ブッダは生まれ育ちました。ここで彼の魂は浄化され、長い戦いののちに、真実の天啓を与えられた人となりました。（1月25日の解説）」

変ホ短調という極めて珍しい調で書かれているが、これは終楽章で長調に転じて変ホ長調となるための布石であろう。僕がこの作品で圧倒されたのは、何と言ってもこの第1楽章の冒頭のオーケストレーションである。冒頭は譜例1のようになるが、これはとてつもないオーケストレーションだと思う。4拍子の音楽だがハープとチェロに3連譜が入ることでリズムの揺らぎが起き、音程も不協和音が混じる不安定なものだ。弦楽器は単なる伸ばし担当と刻み担当に分割され、しかも刻み担当にはスル・ポンティチェロが指示される。これは、駒寄りで弾くことによって金属的な音色を出す奏法で、虫の羽音のようにザワザワした音が出ることになる。楽器は、ヴィオラ以下の弦やコントラファゴットという低音楽器に、ハープと打楽器が加わる。こうして集められた音たちは、茫洋としたもの

Molto sostenuto

ハープ、チェロ (con sord.)
ハープ、チェロ (con sord.)
ヴィオラ (con sord./sul ponticell.)
コントラバス (sul ponticell.) 大太鼓
コントラファゴット
コントラバス、銅鑼

譜例1 第1楽章冒頭

になるはずで、まさにカオスと呼ぶにふさわしい。東洋の精神的支柱である佛教誕生以前のカオスを表現したものと言えようが、「音楽」の概念を超えた音響だと思う。ベルリンで活動する日本人・貴志康一は、東洋人である自分が西洋音楽をする意味を自問していたと伝えられるが、この冒頭の響きを聴くと、洋の東西といった次元を超えて、「そもそも音楽とは何か」といった根本問題までも問うているように感じられる。音楽にとどまらず映画や絵画や詩作にも力を入れていた貴志は、音楽の規範を易々と越えて、人間の周りの環境全体の響きを音楽に包摂してしまったかのような印象を受ける。

こうして始まる長大な序奏では、ホルンがブルックナー4番の冒頭にそっくりな音型を吹奏する。フィナーレで4番と同じ変ホ長調になることや、主題間を休止で分断してしまう大胆な手法も、ブルックナー4番との共通性を感じさせる。貴志がベルリンに着いた(1928年9月15日)直後の1928年10月7日・8日に、貴志が私淑後に面会まで果たす大指揮者フルトヴェングラーがベルリン・フィルでブルックナー4番を指揮している(“Wilhelm Furtwängler

Die programme der konzerte mit dem Berliner Philharmonischen Orchester 1922-1954” F.A.Brockhaus)。確証はないが、貴志がこのコンサートを聴いていてもおかしくはないと思う。19歳の青年に衝撃を与えた音楽の記憶が、人生を賭けて作曲した作品に表出したのではないか、などと想像するのは楽しい。

また序奏部は、低音を主体にしながらもハーブや金属打楽器などきらびやかな音色の特殊楽器が花を添える。釈迦の故郷インド亜大陸の南アジア的なイメージだろうか。貴志はヨーロッパに向かう船旅の途中インドにも立ち寄っているのも、その時のイメージが投影されているのかもしれない。

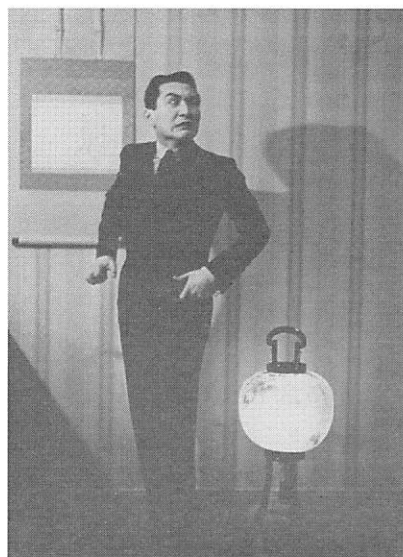
長大な序奏の後、冷徹で厳めしい第1主題と、柔らかな中にも憂いが秘められた第2主題が対照される。あるいは、石造りで冷たいヨーロッパの街並みと、木肌も優しい温暖な東洋とが対比されているのではないかと想像してしまう。

「第2楽章は、立派な慈悲深い女性であるマーヤーについて語ります。彼女は、日本の女性の理想と考えられています。(1月25日の解説)」

「アンダンテ(歩く速さで)」のテンポ設定とも相まって、時間を忘れてゆっくりと散歩するような心地よい伴奏で始まる(この音型は第1楽章でハーブによって原形が示されている)。主旋律を吹く木管の響きは澄んだ水のように透き通っている。貴志は作曲に専心するために一時ベルリン郊外の湖沼地帯ヴァンゼーに滞在した。ヴァンゼーは現在、ベルリン中心地から電車でわずか30分ほどの近さだが、今でも都会の喧騒とは無縁の閑静な保養地で、美しい湖を眺めていると時間が静止したような錯覚にとらわれる。ヴァンゼーでの印象が特にこの楽章に色濃く表れているように思われる。ヴァイオリンのソロが活躍する室内乐的簡素さが魅力の楽章だが、クライマックスでは慟哭するような激しさも聞かれる。釈迦の母・マーヤーの死を悼む場面だろうか。

「第3楽章は不気味なスケルツォで、佛教的な地獄の受難と苦痛が再現されています。日本の説話では、死者の魂を裁く恐ろしい姿の閻魔が、地獄の入口に立っています。(1月25日の解説)」

なるほど、打楽器が轟然と鳴り響き低音楽器が地に沈むように下降していく冒頭はまさに「地獄落ち」だ。しかし、序奏に続くリズムカルな主部も、程好い推進力のある中間部も、恐ろしいというよりはむしろユーモラスに感じる。これは僕自身の経験だが、子供のころ本気で怖がった『地獄草子』の写真を大人になってから改めて見ると、あまりに荒唐無稽でかえって滑稽に思われる。貴志が描いた「地獄のスケルツォ」も、そのような地獄であるが故の面白さを感じさせる。貴志は山田耕筰から「ジョークマイスター」と呼ばれる

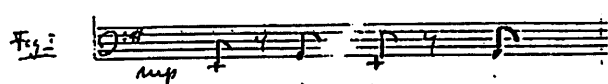


演技修行をする貴志康一

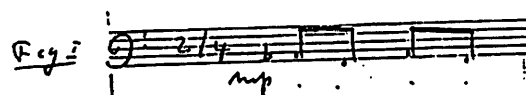
ユーモアある人柄がしのばれる

学校法人甲南学園貴志康一記念室所蔵資料

ほど陽気な人だったそうだが（日下徳一『貴志康一 よみがえる夭折の天才』音楽之友社）、そうした貴志のユーモア精神を楽しめる楽章だ。特に面白いのは、主部・中間部ともに主役を演じるファゴットの動き。主部は譜例 2、中間部は譜例 3 のように始まるが、動きが逆さまになっている。ちょっとしたことだが、センスの良いユーモアだと思う。



譜例 2 スケルツォ主部



譜例 3 スケルツォ中間部

「第 4 楽章では、栄光に輝きながら涅槃（Nirwana）に至った佛陀を描写します。（1 月 25 日の解説）」

「アダージョ」の終楽章は、指揮者・貴志康一の十八番となるチャイコフスキー『悲愴』との関連を思わせ興味深い。諦念に満ちた静かな音楽だが、死を前にしても説法する釈迦の雄姿だろうか、時折ホルンが雄渾に歌う。圧巻は耳を切り裂くような不協和音によるクライマックスだ。貴志は和声を特に重視する人だったそうで、指揮者としても特に響きの美しさに注意を払ったという。そのような貴志だからこそ、逆に叫び声のような凄まじい和声を創案することもできたのだろう。この不協和音は、釈迦涅槃図に描かれる、弟子たちはおろか動物たちもが釈迦の死を悼んで泣き叫ぶ様を彷彿とさせる。この箇所オーケストレイションは秀逸で、2 番トランペットと 3 番（部分的に 2 番）トロンボーンだけが和声の秩序から外れた音を吹く。オーケストラ全体が不協和音でぶつかり合うのではなく、最も音の目立つ金管楽器 2 本だけが規格外の音を担当することで、かえって不協和音の鋭さが増しているのだ。貴志記念室にはこの曲の構想ノートが保管されている。この箇所に該当する部分を見ると、黒鉛筆で書かれた音符に、担当楽器の割り振りが赤鉛筆で追記されている。赤鉛筆の筆跡はスコア（総譜）の筆跡と同じに見えるので、スコアの浄書を担当した作曲の師匠エドヴァルト・モーリッツによる書き込みとみられる。貴志はベルリンでモーリッツに作曲を師事したが、モーリッツはスコアの浄書もするなど献身的に貴志を指導した。ナチス政権下のドイツで立場が危うくなっていたユダヤ人モーリッツにとって、貴志は単に生徒であるだけでなく貴重な友人だったのかもしれない。この効果的なオーケストレイションは、師弟愛が生んだ奇跡と言って良かろう。このクライマックスを終えると、子守唄のような優しい歌に慰められるが、やがて第 1 楽章冒頭と同じカオスが伴奏として再帰し、全曲が巨大な一つの輪となる。コーダはオーボエを主役とする簡潔な音楽になるが、まるで別世界から届いてきた音楽のようで気が遠くなる（このような不思議な感覚を味わう音楽は、僕はこのほかにはシベリウス 7 番のコーダしか知らない）。あるいは 56 億 7 千万年後の世界が描かれているのであろうか。

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村 里香様	谷口 佳隆様	金谷 一紀様
杉本 幸子様	西坂 壽美子様	竹野 繁也様
安藤 美知穂様	小松 朋美様	河内 尚和様
遠藤 時金様	辻 良治様	森永 千一様
井谷 宏美様	西 英子様	高岡 拓也様
鎗本 和弘様	浅野 節子様	

2002 年 4 月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。（12 月現在）

京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Orchester Kyoto

Konzertmeisterin	Bratsche	Kontrabaß	Fagott	Schlagzeug
馬淵 清香※	渡邊 泰里	茂原 尚樹	石塚 有里子	笠井 彰吾※
	池側 将司・	田中 郁太郎	橋場 まり※	国重 沙知※
Violine	河井 奈美・	田中 明江	近藤 紀宏※	平瀬 光代※
板倉 真弓	(Solo)	後藤 志帆※	(Kontrafagott)	榎井 渉※
小幡 拓也	久保 将哉・	丸山 拓史※		(Pauken)
新庄 元子	小坂 智子・	山谷 清秀※	Horn	
中居 楓子	才村 泰子・		北山 絵里	Harfe
森 亜紀	菅澤 穂高・	Flöte	黒田 直樹JAMES	鈴木 貴子※
八木 愉希絵	高原 友洋・	青柳 隆大	長岡 武志	橋本 和恵※
安江 絵美子	富 研一・	高松 香陽子	山影 つぐみ	
渡辺 達之輔	古田 直道・	鳥山 梓	渡辺 悠	
神谷 遼太・	吉川 昌毅・	間嶋 美波		顧問
須田 謙史・		御園生 香	Trompete	和田 之宏
高谷 祐介・	Violoncello	山口 佳美	遠藤 啓輔	
西田 賢仁・	多田 進		北山 武志	団長
西邨 奈穂・	(Solo)	Oboe	芳屋 正幸・	長岡 武志
堀川 陽子・	秦野 貴生	大王 恵里子		事務
安井 信貴・	松浦 悟子	丸井 しずか	Posaune	西村 浩
安原 由克子・	松浦 由香	大坪 右弥・	中村 三鈴	
渡邊 隆寿・	高橋 和也・		藤井 舞	
内田 佳子※	岡野 正義※	Klarinette	宮下 秀行	
福澤 敬子※	高村 誠※	黒田 菜穂子		・：団友
前川 信幸※	富 優※	(Bassklarinette)	Tuba	※：客演奏者
馬淵 清香※		関 英子	中塚 隆介※	
(Solo)		多米 香奈子・		

弦トレーナー・客演コンサートミストレス

馬淵 清香

大阪府出身。桐朋学園大学卒業。小国英樹、原田幸一郎、工藤千博、森悠子、田辺良子、岩崎淑、R. プレンゴラの各氏に師事。1990年全日本学生音楽コンクール第1位をはじめ、イタリア・シエナのギジアーナ音楽祭ギジアーナ・ディプロマ賞受賞、コンセールヴィヴァン・オーディション最優秀賞受賞、イタリア・グッピオ国際Duoコンクール入選、東京国際芸術協会レ・スプレンドル音楽コンクール室内楽部門入賞など、国内外で多数の受賞歴がある。ソロ・リサイタルの開催のほか、オーケストラ、室内楽でも活躍。「DUO MOON STONES」「四次元三重奏団」メンバー。

弦トレーナー

岩井 英樹

名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

管トレーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC、マクベス、A、ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

♪第35回定期演奏会♪

2014年6月15日(日) 京都府長岡京記念文化会館

ショスタコーヴィチ/交響詩『十月革命』

レーガー/バレエ組曲

スクリャービン/交響曲第2番ハ短調

(予定)

♪新入団員随時募集中♪

～私たちと一緒に演奏しませんか? まずはお気軽に見学にお越しください。 団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。第36回定期演奏会(2014年度・冬期)ではショスタコーヴィチの大作「交響曲第12番」の演奏を目指しており、それに向けて団員を増強しています。「一緒に演奏したい!」という皆様のご参加をお待ちしています。

<募集パート>

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス **(弦楽器急募!!!)**

オーボエ・クラリネット・ファゴット・ホルン・トランペット

〔参加資格〕 練習に出席できること。年齢制限はありません。学生の参加も歓迎します。

〔練習日時〕 毎週日曜日(午後1時～午後5時) 春と秋に練習合宿(大津市内。合宿費は10,000円程度)

〔練習場所〕 京都芸術センター、河原町丸太町・荒神口周辺など京都市内各所のほか、大津市など

〔諸費用〕 活動費:3,000円/月 演奏会参加費:20,000～30,000円(学生・初参加の方には割引あり)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: recruit@kyotophilo.com

♪「友の会」会員随時募集中♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

【年会費】 1口 1,000円

【期間】 ご入会いただいた月より1年間

- 【特典】
1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待
 2. その他演奏活動のご案内
 3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel&Fax 075-605-0123 (西村) E-mail: tomo@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。